

2008年6月4日

朝日新聞社

代表取締役社長 秋山耿太郎 殿

大阪本社代表 池内 文雄 殿

DOCOMOMO Japan 代表

鈴木 博之



「朝日ビルディング」・「新朝日ビルディング」の保存に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

本会は、20世紀の建築遺産の価値を認め、その保存を提唱することを目的の一つとする国際的な非政府組織(NGO)であるDOCOMOMOの日本支部です。別添資料にありますように、貴社の「朝日ビルディング」を、日本近代の重要な建築遺産のひとつと認識し、本支部が2003年に選定した「DOCOMOMO Japan 100選」のひとつに挙げさせていただいております。本会主催の展覧会「文化遺産としてのモダニズム建築—DOCOMOMO100選展」(2005年3月12日～5月8日、松下電工汐留ミュージアム、2006年9月23日～11月5日、大阪市立住まいのミュージアム)でも広く紹介させていただきました。

今般、当該建物の存続が危ぶまれる旨の新聞報道を受けて、ここに同建物および「新朝日ビルディング」の保存を要望いたします。

御承知のように、「朝日ビルディング」は竹中工務店の設計施工(設計担当は石川純一郎)により、1931(昭和6)年に建設された、鉄骨鉄筋コンクリート造10階建て、地下2階建ての建物で、関西のモダニズム建築の代表例のひとつとして知られております。1968年には同建物南側にデザインを踏襲しつつ、増築がなされています。一方、「新朝日ビルディング」は、1958年(昭和33)に竹中工務店の設計施工(設計担当は小川正)によって建てられました。鉄骨鉄筋コンクリート13階建て、軒高45mの建築物で、竣工当時は日本で最も高い建築物であり、規模においても建築面積8,153平方m、延床面積75,786平方mに達し、戦後最大規模と謳われていました。

1920年代以降、建築は、形態においては装飾を排除して幾何学的な単純さを志向し、建築観においては合理性・機能性を重視し、技術的には鉄筋コンクリート構造・鉄骨構造の特徴を活かそうとする特徴を示しはじめます。それまで西洋建築の根本にあった歴史様式を離れて、全く新しい相貌を呈していくこととなります。この潮流は、今日一般にモダニズム建築と総称されています。モダニズム建築は、太平洋戦争後は建築界の主流となります。現代の建築もほとんどがモダニズムを基調としているといつてよいでしょう。

「朝日ビルディング」は、日本のモダニズムの開幕を告げる作品として、完成当初から建築界の注目を集めました。一方、「新朝日ビルディング」は高度経済成長の開幕を告げる清新なデザインに加えて、フェスティバル・ホールおよび朝日放送を中核とする都市文化の発信によって広く親しまれてきました。

貴社におかれましては、「朝日ビルディング」「新朝日ビルディング」の建築的価値については十分に御承知のこととは存じますが、あらためてこの二つの建物の文化的意義と歴史的価値についてご理解いただき、かけがえのない文化遺産が長く後世に継承されますよう、慎重にご検討下さいますよう要望申し上げます次第です。

「朝日ビルディング」と「新朝日ビルディング」の歴史的価値は次のようにまとめることができます。

#### 1) 日本のモダニズム建築の里程標的存在であること

19世紀までの様式建築は、装飾の多い複雑な形態を持ち、材料においても石や木、レンガといった自然素材に基づいた素材を用います。壁は厚くて窓は小さく、まさに重厚なイメージを与えます。これに対してモダニズムは単純化された幾何学的な形態を有し、材料は、金属やコンクリートなど人工的で工業製品によります。特にガラスを多用した軽快で開放的なたたずまいはモダニズム建築の大きな特徴です。「朝日ビルディング」は外装材にアルミ、ステンレスの金属パネルを大量に用い、ガラス張りの階段室や艦橋を連想させる航空標識塔といった大胆な意匠を徹底しています。1931年の段階では、ヨーロッパでもこれほどモダニズムの美学を徹底した建築作品は少なく、日本では驚嘆をもって迎えられ、「日本で最もセンセーショナルな建物」と呼ばれました。この先進性が「朝日ビル」の最大の特質ということが出来ます。

一方、1950年代後半から60年代前半は、モダニズムのデザインが、それまでの模索と提案の時代から、工業化の推進や大衆性の向上を目指して新たな展開を遂げていく時代であったといえます。「新朝日ビルディング」では、外壁面にアルミのプレス・パネルを採用しています。これは、デザインの陳腐化を防ぐために交換が容易な工法を目指したもので、その合理性は建築界に大きな反響を呼びました。それと同時に、フェスティバル・ホールの外壁においては、行動美術協会の制作した巨大な壁画が設けられました。モダニズム建築でタブー視されてきた装飾がここでは万人が納得できる必然性を発揮しています。このようにこの二つの建物は、ともに日本のモダニズム建築の里程標的存在であるといえます。

#### 2) 大阪のランドマークとして貴重な存在であること

一方、1930年代の大阪は周辺町村を編入して「大大阪」と呼ばれることとなります。建築においても、綿業会館、復原大阪城天守閣、大阪ガスビル、大阪証券取引所といった大建築が次々と生まれます。「朝日ビル」もそうした大阪の活況の一翼を担う存在であります。特に渡辺橋のたもとにあって堂島川を望む立地から、水都大阪のランドマークとなりました。

「新朝日ビルディング」においても、土佐堀川側の壁画の親しみやすさ、堂島川側の堂々たるスケールと明快な表現はどちらも大阪の戦後の発展のシンボルです。四ツ橋筋の両側に、金属パネルを外装材とする2建築が向かい合う斬新な風景は近現代の大阪の先進性を象徴するものといえましょう。また、1階外周をアーケード化するなど敷地を広く公共に開放していることによっても、この建物は親しまれるものとなっています。

こうした都市景観上の価値も逸することはできません。

以上のことから、「朝日ビルディング」と「新朝日ビルディング」は、さまざまな価値を有する貴重な建築文化遺産であると考えられます。今後、適切な保存活用の方途を見出し、このかけがえのない建築が後世に継承されますよう、格別の御配慮を賜りたく、ここにお願い申し上げます。

最後に、もし求められましたら、本会といたしましては、この建物の保存活用の方途について建築の専門家という立場から助言させていただく用意のあることを申し添えます。